

蔵出しお宝ニュース

— 第 43 号 —

三原市歴史民俗資料館では、所蔵資料の本格的な整理・展示のリニューアルに取り組んでいます。本紙では、資料館内で長らく眠っていた三原市ゆかりの貴重な資料の解説と行事の案内・紹介などを随時行って参ります。

第3回 蔵出しお宝展 開催

平成26年10月25日（土）・26日（日）に第11回三原浮城まつりが開催されますが、その協賛行事として10月23日（木）から27日（月）までの5日間（10:00～18:00）、「第3回 蔵出しお宝展」を三原駅前のパアシティ三原西館2階の市民ギャラリー・ギャラリー1にて開催いたします。



(上) 市重文・紙本著色三原東町絵図

三原市立中央図書館蔵

(下) 甲冑4領

三原市・三原市歴史民俗資料館・

三原市久井歴史民俗資料館・三原二之丸会蔵

今回の企画展では、資料館所蔵の「三原城郭内之図」や「備後三原城本丸内建物」,「三原城を築く際に使われたシダ」,個人蔵の「短刀 銘(表) 備前国 住長船祐定 作(裏) 天正四年八月日」などの初公開資料もあります。室町時代後期の備前物(備前国で打たれた刀剣)を末備前と呼んでいます。末備前の著名な刀工に、祐定の一門がいます。その中でも彦兵衛尉祐定,与三左衛門尉祐定,彦左衛門尉祐定,源兵衛尉祐定などの俗名を冠する刀工が知られており、幾多の名作を残しています。

今回展示の短刀は俗名を冠していませんが、銘の書体から七郎右衛門尉祐定の作と鑑ぜられるものです。七郎右衛門尉祐定は源兵衛尉祐定の子です。小早川隆景の養子で、岡山城主となった小早川秀秋に召されて刀剣を鍛作しました。

また、10月26日(日)の10:00～15:00は、「研師・柄巻師の匠がやってくる!」も開催します。備前長船刀剣博物館内の工房でも活躍される、日本の伝統美術工芸を受け継ぐ職方のうち、研師は福武審一先生、柄巻師は橋本幸律先生が、まつりの賑わいに花を添えてくださいます。洗練された匠の技をご堪能ください。

資料館マメ知識 「三原物」とは？ 其の2

江戸時代に編纂された「古刀銘尽大全」によれば、初代正家を天平（729～48）頃の人とし、また中興の祖として徳治～正和（1306～12）頃の正家をあげていますが、通説では徳治頃の正家を初代とし、備後鍛冶の始めとしています。



三原市糸崎3丁目にある、正家使用の井戸

徳治頃（1306年頃）の三原は寒村で、三原以外の所で作刀していたという説（古三原には銘に“三原”の文字が切られていないため。）がありますが、愛媛県松山市の石手寺に現存する灯籠の台座（鉄铸件）に「安養寺奉施入燈籠之事大願主僧昌徹備後国三原之大工津守守真嘉元四白丙午二月日謹記」と銘があり、嘉元4年（1306）＝〔徳治元年〕の年紀から、三原地方における鑄物師の活躍が見て取れ、併せて刀鍛冶も三原を中心に発展し、分派していったものと考えられます。木梨荘の杉原氏・沼田荘の小早川氏の需要があったことも関係していると思われます。温暖な気候も作刀に適していたと言えるでしょう。また、海に近いことで全国に流通させることができました。

小早川隆景が三原城を築いた永禄頃に、木梨三原や其阿弥等の三原派の刀工が城下に続々と移り住んできました。その後城主が福島家・広島藩筆頭家老の浅野家に替わり、元和の頃から刀剣の需要も少なくなったため、三原の刀工は広島や岡山などの他の地域に移り住んで家業を続けたか、野鍛冶になったと思われます。正命を最後に、三原物の刀鍛冶は姿を消しました。

※以下、次号へ続く。

三原物の系譜 1

三原	現在の三原市に居住して活動したと思われる。
法華一乗	現在の福山市草戸町付近で活躍しました。「一乗」は法華宗に帰依して名乗ったものです。
三原	現在の福山市鞆町で活躍しました。
木梨三原	現在の尾道市木ノ庄町で活躍しました。
其阿弥	尾道を拠点に活躍しました。時宗の真教上人が尾道を訪ねた際に「御札切小刀」を献上したところ、「其阿弥」という号を賜ったといわれています。五阿弥と記すこともあります。

発行 平成 26 (2014) 年 10 月 23 日
〒723-0015 三原市円一町二丁目3番2号
三原市歴史民俗資料館
TEL 0848-62-5595

※本冊子に掲載の写真などは、許可なく転用されないようお願い申し上げます。